



Title	コンテンツツーリズム：メディアを横断するコンテンツと越境するファンダム
Author(s)	山村, 高淑; シートン, フィリップ
Citation	i, 1.-, 382. 本書は北海道大学出版会から2021年に紙媒体で出版したものを、紙媒体絶版を期に、出版社の許可を得て、北海道大学観光学高等研究センターが電子版としてオープンアクセス化したものです。
Issue Date	2024-04-01
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/91559
Type	book (author version)
Note	本書から引用を行う場合は、書誌情報を以下のようにご記載下さい。 山村高淑, フィリップ・シートン 編著・監訳, [2021] 2024, 『コンテンツツーリズム メディアを横断するコンテンツと越境するファンダム』, 北海道大学観光学高等研究センター.
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	17_Chapter 13.pdf (個別ファイル：第13章 バンジョーから芭蕉まで 詩人, コンテンツ, そしてツーリズム)



[Instructions for use](#)

本書から引用を行う場合は、書誌情報を以下のようにご記載下さい。

山村高淑，フィリップ・シートン 編著・監訳，[2021] 2024，『コンテンツツーリズム——メディアを横断するコンテンツと越境するファンダム』，北海道大学観光学高等研究センター．

第13章

バンジョーから芭蕉まで ——詩人、コンテンツ、そしてツーリズム

スー・ビートン

1. イントロダクション

詩は私たちを自身の内面世界だけでなく、他者や場所にさえ情緒的に結び付ける。このため詩は、ツーリズム経験における非常に強力な要素となり得る。1950年代のビート詩人から今世紀のヒップホップやポエトリー・スラムに至るまで、現代の詩人は様々な形で今日のポピュラーカルチャーに溢れている。しかし、我々の集会的な魂に触れるのは、より古風な詩人のように思われる。これは、記憶やノスタルジアの果たす役割と同様、詩が魂に触れるのにかかる時間を単に反映しているからかもしれないし、あるいは、より深く、より基本的な理由によるのかもしれない。オーストラリア人である筆者にとって、詩人A・B・“バンジョー”・パターソン(A.B. ‘Banjo’ Paterson, 1864-1941)¹⁾によって作り出されたイメージやストーリーは、筆者自身のオーストラリア人らしさの核となっているのと同時に、我々オーストラリア人のツーリズム経験においても、しばしば参照されるものでもある。『スノーウィー川から来た男』(*The Man from Snowy River*)や『ワルツィング・マチルダ』(*Waltzing Matilda*)といった象徴的な詩は、舞台となったオーストラリアの奥地(bush = ブッシュ)に宿るのみならず、我々の魂の中にも宿っているのだ。

移民を含め多くのオーストラリア人の心は、未だにこうした詩とつながっている。また、オーストラリアを冒険の余地が残る最後のフロンティアと見なす無数の訪問者に対しても——想像の世界としてのオーストラリアを垣間

見せるだけでなく——これらの叙事詩に描かれた感情、ロマンス、そして冒険は、より豊かなツーリズム経験を提供する (Beeton 2016)。

似たような形で、日本の詩人、松尾芭蕉 (1644-1694) は、有名な詩の紀行で我々を日本の旅に誘う。芭蕉の最も有名な『おくのほそ道』は、日本文学の最高傑作の一つと考えられている。本章では、バンジューと芭蕉という、一見関連性の無い2つの詩の形態を通じて、詩と自己との個人的および情緒的なつながりについて検討し、こうしたつながりをどのように〈コンテンツツーリズム〉の枠組みに位置付けることができるのか、議論してみたい。

2. コンテンツツーリズムとしての詩

コンテンツツーリズムという用語自体は日本で誕生したものだが、日本や日本文化にだけ当てはまるものではなく、関連する現象は世界中で観察することが可能だ (Beeton *et al.* 2013)。実際、国際的にも多くの研究者が、〈コンテンツ〉 (content) と人々との間の深いつながりについて研究を行なっている。例えば代表的なものに、シュタイン・レインデルス (Stijn Reijnders) によるイギリスとEUにおける〈想像の場〉に関する研究や (Reijnders 2011)、筆者による動画の持つ情緒的役割に関する考察 (Beeton 2015) 等がある。また筆者らは、「メディア化する文化——日本のコンテンツ・ツーリズムとポップカルチャー」 (Beeton *et al.* 2013) で、コンテンツツーリズムの持つ物語性に関する考察を行なったが、この点は本書において、多くの執筆者によって発展的に議論がなされている。

本書の第1章でシートンが述べているように、コンテンツツーリズムは3つの基本的要素から成る。すなわち、物語性、キャラクター、そして多様なメディア形式だ。当然、詩は多くの、深く、多様な〈物語性〉を我々に与えてくれる。そして、本稿で2つの事例を通して示すように、我々は多様なメディア形式を通して詩の世界に触れることができる——それは、朗読から、活字、映画、ソーシャルメディア、さらには詩人ゆかりの地、記念碑やイベントまで多様である。

ポピュラーカルチャーの多くの側面——映画やテレビから音楽やアートに至るまで——が混然一体となってコンテンツツーリズムを作り上げている。しかし、詩については未だ十分に探究されているとはいえない。詩は、我々の情緒面に深くつながり、エモーショナルなツーリズム経験を容易に作り出せる、創造的な存在であるにもかかわらず、である。

もちろん今日も詩は一般大衆の物語を構成する要素である。しかし、時間の流れこそが、国民レベルで心に大きく響く作品を育てていく点も忘れてはならない。バンジョーと芭蕉を例にコンテンツツーリズムを見ていくことの意義はこのあたりにあるのである。

3. 詩が誘発するツーリズム

詩をきっかけとした旅は、しばしば文学ツーリズムの一部分と見なされるのだが、詩は、非常に想像力に富んだ抒情的な表現でありエンターテインメントである。詩は、ファンに対し、情緒的な経験と、詩人だけでなく題材との情緒面でのつながりを与える。なお、詩の形式は一様ではない。具体性、描写性、そして物語性に満ちた長い〈叙事詩〉から、限られた言葉によって精神世界と外界の両者を暗示する、短く繊細な〈俳句〉に至るまで実に様々である。いずれの創作形式も、その古さにかかわらず、今なお意味を持ち続けている。しばしば叙事詩的な表現形式で著される、オーストラリアの奥地〈ブッシュ〉をテーマにした詩、bush poetryは、過小評価されることが多いものの、オーストラリアの(主として白人の)国民意識を伝えるものとして、その物語性は高い人気を誇る。俳句もまた日本の国民意識を伝える存在である。したがって、両者はそれぞれの国を訪れる人々に対し大きな訴求力を持つ。言語を学んだり、地元の料理を食したり、地元の音楽を聴いたりすることを通じて文化に参加する行為と同様、ある場所について著された文学を読み、理解することは、単なる物見遊山では得られない場所とのつながりを、ツーリストに与えてくれる。

筆者は1982年に、ホースバック・サファリ(horseback safari=乗馬による

サファリ・ツアー、乗馬アドベンチャー・ツアー)に初めて参加した。旅は、オーストラリアの最も象徴的な詩の一つである『スノーウィー川から来た男』にインスパイアされた映画に基づいたものだった。この詩は、今日でもオーストラリアの奥地でキャンプファイアーを囲んで朗読されるものだ。ツーリズムを通じてこの詩に流れる生き生きとした要素を実体験できたことは、筆者にとって人生の方向性を変える崇高な体験となった。1989年には、筆者自身がこうしたツアーのガイドとしてかかわるようになり、その後、最終的にはツーリズム研究者となり、ポピュラーカルチャーが実用面と理論面において持つ力について研究を続けることができたのだ。

こうした研究が、筆者を、日本を含む他文化や、その国や地域を代表する様々な芸術家、映画制作者、そして詩人たちとの出会いへと導いてくれた。日本では、美術や芸術性が場所を特徴付ける例は枚挙に暇がなく、風景自体が詩的表現を刺激するものであることを知った。

思い起こせば10代の頃、筆者は詩を通して自分自身を表現することに熱心だった。筆者が日本の俳句が持つ繊細な簡素さと出会ったのは、詩だけでもたらし得る感情面の深さに触れたいと特に望んでいた時期だったと記憶している。筆者は最近、筆者の心に深い感動を与えた松尾芭蕉の俳文(俳句を配した短い散文)の足跡をたどるという喜びを経験したが、その喜びは筆者が外国人であり、訪問者、ツーリストとして、この旅を経験したことによる点が大い。したがって、本章で記す芭蕉についての筆者の旅は、日本の友人の皆さんからすると、皆さんが持つ芭蕉の世界に対するイメージとは少々違って映ることと思う。

A・B・“バンジョー”・パターソンによる叙事詩は、松尾芭蕉の繊細な俳句とは時代的にも地理的にも、そして形式的にも大きく異なり、隔たったものである。しかし、どちらも筆者の心に響くのである。一方は、筆者自身の物理的な人生、もう一方は、筆者の精神世界の旅と日本の感覚について語っているものなのだ。簡単に言うと、筆者が考察を行なっているのは、筆者の母語で書かれた詩が母国内の旅行(筆者の母国であるオーストラリアの国内旅行)の経験にどのように作用するのかという点、それと並んで、他国の詩と文化が、当該国への、国境を越えた旅行経験をどのように特徴付けるのか

という点である。

子供の頃、“バンジョー”・パターソンの『スノーウィー川から来た男』等の詩を聞いて、筆者はとても感動したし、その後実際に(乗馬を通じて)詩に描かれたとおりに田舎を体験する機会を得たときは、強く心を揺さぶられた。同様に、日本で芭蕉の足跡をたどりながら彼の作品に思いを馳せた時、これまで日本で経験したことが無い、場所とのつながりを感じたのだ。

本章では、オートエスノグラフィーを通じて、筆者自身を「データ」として扱い、コンテンツツーリズムの理論的視座から、こうした詩と場所との強いつながりについて考察を行なう。実際、詩をこうした観点から見ること、従来の〈文学〉という枠組みの束縛から離れ、詩の世界を旅、ツーリズムに自由に拡張していくことができると考えている。

4. オートエスノグラフィー

オートエスノグラフィー(ベンジャミンによる第12章も参照)は、目下十分に理解されていない研究手法・アプローチであり、時として、そうした手法に賛同する研究者にさえも適切に扱われていないものである。この手法は、虐待や暴力といったケース等で個人情報に深くアクセスすることが不可能な場合に用いられることが多い(Beeton 2008, 2016)。エスノグラフィックな(民族的な)まなざしを人の内面に向けることで、より広範な経験的世界を理解することが可能になる、という考え方だ(Denzin 1997: 227)。しかし、自分自身をデータとして用いる場合、深い内省と暴露が求められる。そうしない限り、単なる回想録の範疇に止まってしまうことがあるからだ。

ツーリズムは、上記の(虐待や暴力といった)状況ほど個人的なものではないかもしれない。しかし、特定の経験に対する情緒的な反応や内省を明らかにしたい場合、他者からはこうしたものを探り出す術はない。また、通常、ツーリスト行動の根底にある動機を説明しようとする場合、自分自身の情緒的反応を、他者の行動に重ねる危険性がある。と同時に、他者の深い感情を解釈しようとする際には、倫理的な懸念も生じるだろう。

しかし、ツーリズム〈経験〉という世界において、情緒的反応や内省は重要である。だからこそ、こうした深い感情について我々は理解する必要があるのだ。これを達成するための唯一の方法は、自分自身を読者の眼前にさらけ出すことであると筆者は考えている。まさに、これがオートエスノグラフィを採用するキーポイントなのだ。

5. オーストラリアの詩神からツーリズムの物語へ ——A・B・“バンジョー”・パターソン

19世紀後半、オーストラリア人は、ナショナリズムの象徴として、ブッシュ(奥地)の精神を意識するようになった——同様の事象は、記録に残っていない言い伝えの中においても、無意識的な流れとして既に発生していたが——(Ward 1966)。あらゆる創造的な芸術の中でも、19世紀末から20世紀初頭にかけての大衆文学は、当時非常に多くの人々の手に取られたものであり、時代の風潮を映し出し、そして創り出した、非常に強い影響力を持った存在であった。週刊誌 *The Bulletin* の人気は、大衆文学を、当時最も影響力のある唯一無二の媒体へと仕立て上げることにつながった。ヘンリー・ローソン(Henry Lawson)、“バンジョー”・パターソン、ジョセフ・ファーフイ(Joseph Furphy)といった詩人や作家の作品に対する人々の支持は、「ブッシュマンあるいは流浪の羊飼い、朗らかで女性嫌い、そして簡潔で実行力のある兄貴(Mate)」という、オーストラリア人のイメージ形成に大きく貢献したのだった(Wallace-Crabbe 1971: xi)。

大衆文学はこうしたイメージの形成と拡散に大きな役割を果たした。都会の読者は日常生活の場からは失われてしまったロマンチックで牧歌的なテーマをブッシュ文学の中に見出し、こうしたブッシュ文学を熱心に支持した。*The Bulletin* の共同設立者であり編集者でもあったJ.F. Archibaldは、当時の民主的で過激な作家に、国民に対する発表・議論の場を与え、こうしたオーストラリア人のイメージを広げていくことに貢献した。このような発表の場では、ローソンやバンジョーが常連の寄稿者であった(Moore 1962)。

The Bulletin は1880年の創刊からほどなくして、強い政治的、文学的、文化的影響力を持つオーストラリアの全国誌となった。特に1890年代半ばから連邦成立初期にかけては、当時の熱狂的なナショナリズムを標榜するメディアとなる。オーストラリアの文学史において、*The Bulletin* の創刊は最も重要な出来事の一つと見なされている。当時のインテリ層の道徳観の中にある、民主的で精力的な姿勢を紙面に取り入れたためだ(Hadgraft 1963)。したがって、オーストラリア人イメージの形成に関する研究は、全て *The Bulletin* と関連付けられると言っていい。

バンジョーは1886年に *The Bulletin* にいくつか詩を投稿した後、Archibald と会い、彼から「ブッシュに挑戦してみるのだ。そしてできることなら、他の人が書いているようなものは一切書かないように」とのアドバイスを受けた(Stone 1997: 13)。バンジョーは、ブッシュ・バラード(bush ballads)²⁾と、オーストラリアの人々のコンテンポラリーな声と見なされていた人気の古いブッシュの歌とを結び付けた。オーストラリア独自のスタイルを追求していたオーストラリアの作家たちは、ヨーロッパ風の街からアウトバックに目を転じるようになり、ブッシュの伝統を確立していった。*The Bulletin* はこうしてブッシュの〈伝統〉を、〈伝説〉に変えることに成功したのだった(Crawford 1960)。

機知に富んだブッシュマンのイメージが繰り返し描かれるうちに、オーストラリア人の永続的なイメージを確立するうえで欠かせない要素として、彼らの〈馬〉が登場した。〈馬〉はストーリーに不可欠な要素として、バンジョーによる『スノーウィー川から来た男』、『ジーバング・ポロ・クラブ』(*The Geebung Polo Club*)、『オーバーフロウ牧場のクランシー』(*Clancy of the Overflow*)、そしてローソンによる『リーディー川』(*Reedy River*) や『アンディは牛と消えた』(*Andy's Gone with Cattle*) といった、不朽のブッシュ・バラードに取り入れられている。こうした詩の多くは、オーストラリアの先人たちが抱いていた馬術や大胆さに対する尊敬の念を力強く歌い上げている。例えば、『スノーウィー川から来た男』で描かれた馬旅のストーリーに興奮を覚えないオーストラリア人は発表時、ほとんどいなかったであろう。そして今日の筆者も、この詩に強い感動を覚えるのである。

第3部 巡礼としてのコンテンツツーリズム

馬は燧石すいせきを弾き飛ばして 走り続けた
道を阻む枝を飛び越え 走り続けた
スノーウィー川の男は 鞍から微動だにできなかった——
この山の馬乗りが駆ける姿は圧巻だった……

馬達が怯え疲れ果てて止まるまで。それから、男は馬と家路についた
一人、誰の手も借りずに、馬達を連れ戻した

He sent the flint-stones flying, but the pony kept his feet,
He cleared the fallen timber in his stride,
And the man from Snowy River never shifted in his seat-
It was grand to see that mountain horseman ride...

'til they halted, cowed and beaten; then he turned their heads for home,
And alone and unassisted brought them back.

A・B・“バンジョー”・パターソン、『スノーウィー川から来た男』から抜粋³⁾

1890年代に発表された『スノーウィー川から来た男』は、当時、最も広く流通し、あらゆる詩や文学に対して広範な影響を与えた作品である (Palmer 1971)。また、Wardは『スノーウィー川から来た男』で描かれた伝説を、現代オーストラリアの移民の子孫たちは、自分自身のオーストラリア人としてのアイデンティティの一部に取り入れているようだと述べている (Ward 1963)。実際、オーストラリア放送協会が最近放送した、オーストラリアの野生の馬 (詩の中心的テーマを構成している) に関する時事レポート番組では、この詩が夕刻にキャンプファイアーを囲んで朗読されている様子を取り上げていた (Morris 2018)。

6. 様々なメディアによる『スノーウィー川から来た男』

前述したコンテンツツーリズムの3要素(すなわち、物語性、キャラクター、多様なメディア形式)の一つである〈物語性〉(を与えてくれる存在)として、この詩は確かにコンテンツツーリズムの一部になっている。この詩から着想を得て創作され、そしてツーリズムを誘発した、他の形態のコンテンツには、映画——『スノーリバー——輝く大地の果てに』(*The Man from Snowy River*) (1982)、『遙かなるスノー・リバー』(*The Man from Snowy River II*) (1988)——、テレビシリーズ*Snowy River: the McGregor Saga* (1993–1996)、20年以上も続いているフェスティバル*The Man from Snowy River Bush Festival*等があり、今なお人気を集めている (Beeton 2015, 2016)。

■ 映画

映画『スノーリバー——輝く大地の果てに』とその続編は、その感性、ストーリー、映像ともに非常に鮮烈で、高い人気を得た。そして映画を観た多くの人々が、作品で描かれた土地〈最後のフロンティア〉——しばしばビクトリアン・ハイ・カンントリーと見なされる——を訪れ、映画の感動を追体験することを望んだ。このことは、乗馬アドベンチャー・ツーリズム (horseback adventure tourism) 産業の発展を促す。映画公開以前は、乗馬アドベンチャー・ツーリズムの業者は2社だけだったが、続編映画の公開から約5年後には30社近くにまで増加した (Beeton 2001)。筆者が *Beeton's Guide to Adventure Horseriding* (1994) というガイドブック執筆のためのリサーチを行っていた1990年代初頭、20社以上のツアーに参加した。その際、いずれの業者も、宣伝材料に同映画のイメージや言葉を使っていた (Beeton 2015)。この映画とその後のこうしたツアー参加の経験があったからこそ、筆者自身も乗馬ツアーにガイドとしてかかわるようになり、その後、最終的には研究者の道を歩むことになった。映画と乗馬ツアーが、筆者の人生の方向性を変えたのだ。

2012年に筆者は、同映画の主演俳優トム・バーリンソン (Tom Burlinson) とともにロケ地を訪れるという、完売になったツアーを企画することになった。2012年と言えば、映画公開から30年が経過し、ツアー参加者の多くは公開当時は生まれていなかったのだが、ツアー中、参加者はスターとともに象徴的なシーンを再現したり、馬を操って山腹を駆け上りながら映画のテーマ音楽の鼻歌を歌ったりして、大いに楽しんだのだった(口絵13)。また、この6日間のツアー行程のうち3日間は、オーストラリアの朝のテレビニュース番組で取り上げられ、詩と映画の影響力が継続していることが報道された (Beeton 2015)。

筆者は当該地域でそれまでに何度も乗馬経験があったものの、自分の人生を変えた映画でアイコン的な役を演じた俳優とその場を訪れたことは、とても強烈で興奮する経験となった。星降る夜にキャンプファイアーを囲んで、彼がその詩を朗読するのを聞き、心が大きく揺さぶられたことを今でも覚えている。

■テレビシリーズ

バンジョーの詩と直接的には関係しないが、彼の詩や前述の映画で描かれた有名な馬旅の25年後を描いたテレビシリーズが1990年代に製作された。同テレビシリーズの舞台は、架空の町パターソンズリッジ (Paterson's Ridge) ——その町の名は詩人“バンジョー”・パターソンに由来する——である。この *Snowy River: the McGregor Saga* (1993–1996) というタイトルのテレビシリーズは、当初アメリカ市場向けに製作され、高評価を得た。同シリーズに出演した、ガイ・ピアースやヒュー・ジャックマン等、多くの俳優が、その後国際的に活躍するスターへと成長していった。同シリーズの撮影セットは、メルボルン近郊のカッテミング (Kattemingga) に建造された(図13.1)。セットは数年前まで残っていたが、現在は土地が売却され仏教の僧院になっている。筆者は数年前に同地を訪れたが、土地の所有者は大きなツーリズム振興の機会を逸してしまったように思われた (Beeton 2015)。



図 13.1 カッテミンガのテレビシリーズ撮影セット
筆者撮影。

■フェスティバル

ビクトリア州北東部の小さな山間の町コリヨング (Corryong) は、バンジョーが彼の詩『スノーウィー川から来た男』で〈男〉のモデルにした〈本物の〉男 Jack Riley の故郷であり、永眠の地であるとされている。バンジョー自身が、〈男〉のモデルは、様々な人物を融合させていると主張していることから、これが事実として証明されたわけではないが、コリヨングの町は詩(と映画)が作り出した伝説によって繁栄し、毎年フェスティバルを開催して、こうした作品とのつながりを祝している。*The Man from Snowy River Bush Festival* (<https://www.bushfestival.com.au>) は、映画によって詩のストーリーに対するオーストラリア内外の関心とイマジネーションが高まったことを契機に、1995年から開催されている。4日間にわたる、競技会、シーンの再現、ブッシュをテーマにした詩に関するイベント、その他、バンジョーの詩や映画の中でたえられているスキルに関連する様々なイベントに、多くのツーリストが集まる。来訪者の大半は国内からであり、その多くはレクリエーション用競技場でキャンプを行なう。当フェスティバルにより町は活性



図 13.2 ‘I was there’——『スノーウィー川から来た男』像の前で写真を撮る観光客
筆者撮影。

化し、町は〈詩というメディア〉の新たな形式を体現している。フェスティバルの人気は現在も続いており、2017年にはオーストラリアのABC TVで特集が生まれ(ABC 2017)、2018年にも同番組が再放送されている。

コリヨングには、Rileyの墓地に加え、『スノーウィー川から来た男』の博物館(*The Man from Snowy River Museum*)や、大通りに置かれた有名な(架空の)馬旅を祝した像等の人気スポットがある。観光客にとってこの像は必見のスポットであり、感動とともに像の写真は何枚も撮るのである(図13.2)。

7. 筆者にとって『スノーウィー川から来た男』の詩が意味するものとは……

ここでは、オートエスノグラフィーを通して、バンジョーの詩、その詩の様々なメディアでのアダプテーション、そしてそれらに付随するツーリズムが、筆者自身にとって何を意味するのか、考えてみたい。なお前述のとおり、こうしたオートエスノグラフィーによるアプローチは、勝手気ままなものとなってしまう真の知識を生み出さない危険性があるため、簡単なものではない。しかし、コンテンツツーリズムの枠組みの中で筆者自身を内省することは、様々な形式の創造的コンテンツとツーリストとの間の、密接な関係を理解する第一歩になると筆者は考える。

既に述べたとおり、筆者は自分の人生で何がしたいのか長年にわたりわからなかったが、映画とそれに伴って生まれたツーリズムによって、職業としてツーリズムに飛び込むことになった。そしてその後に行なった学術研究や調査は、乗馬ツーリズムや、フィルム・インデュースト・ツーリズム (film-induced tourism) に関するものが多くを占めている。ただ、筆者自身、この分野で博士号を取得する意図はそもそも持っていなかった。大学を20歳で中退して以降、自分は学業には向いていないと信じていたので、当時もしそんな考えが思い浮かんだとしても、笑い飛ばしていたことだろう。

いずれにしても、バンジョーの詩の内容とその後のメディア化作品群は、筆者自身の職業的な進路を決めただけでなく、今でも感情に訴え続け、感動を与え続けてくれている。詩の言葉がどのように筆者を掻き立てるのかについては前述のとおりであるが、1982年の映画公開以降は、サウンド・トラックが、映画ゆかりの地や場面にだけでなく、詩にも筆者を引き戻す。そして子供時代に、ゴムの木が夏の風に揺れて手招きする光景を、教室の窓から眺めて感じた憧れや喜びも思い出す。どういうわけか、この詩の思い出はいつも夏なのだ。

その後何年も経ってから、乗馬アドベンチャー・ツアーで、映画に出てきた田舎道をたどることができたことは、筆者にとって——ほかの多くの人々にとってもそうであったように——このうえなく素晴らしい経験だった。筆



図 13.3 山の牛飼いに扮したツーリスト
筆者撮影。

者自身、ツアー現場で、ツアー客が——例え初めて馬に乗ったのだとしても——詩や映画で描かれた荒っぽい乗馬を真似る様を何度目撃したかわからない(図13.3)。

また筆者は、映画やフェスティバルでたたえられたスキルを競う〈ブッシュ・レース〉(bush racing)にも何度か参加した。また、馬や出会った人々について、筆者自身が〈bush poetry〉(ブッシュをテーマにした詩)を書き、発表もしている。言い換えればバンジョーの一編の詩が、結果的に、筆者自身の叙事詩的ブッシュ・ポエム(bush poems)になっていったのである。

ツーリズム研究分野で筆者の名が知られるようになり、映画やツーリズム関係の会議での講演——多くは基調講演——の依頼を受けるようになった。こうした講演の場で自己紹介をする際は、映画のワンシーン——爽快に山を駆け降りるシーンを、同じく爽快なBGM付きで——を見せながら行なうようにしていた。この映像を何百回となく見ているが、今でも見終わるときは感動で打ち震える。こうした感情面の反応というものが、人々を、映画を検

索し鑑賞させ、スピノフの様々な機会に参加させていく原動力となるのだ。映画の映像と音楽は、間違いなくバンジョーの詩を反映している。そして、筆者自身の、ツーリスト、ツアーガイド、研究者としての個人的な旅もまた、この詩を反映していると言えるのだ。

筆者自身だけでなく、多くの人々の経験が、バンジョーの詩をめぐる様々なメディア作品によって特徴付けられている。アイデンティティを求めるオーストラリア人であれ、最後のフロンティアを求める海外からの訪問者であれ、ツーリストとして詩の中の感動的な旅を分かち合い、自分自身のためにこの旅を再現したいという強い思いを、バンジョーの詩と関連作品は生んでいるのである。これは明らかにコンテンツツーリズムの領域に当てはまる現象である。

8. 日本初期の紀行作家と巡礼——松尾芭蕉

松尾芭蕉は日本で最も尊敬されている詩人の1人である。存命当時から芭蕉は有名で、多くの生徒や弟子を抱えていた。そうした門人の1人によると、芭蕉はご飯茶碗、菜切り包丁、米櫃のみを所有し、簡素な暮らしを送っていたという (McBride n.d.)。芭蕉は時折、日本各地を訪れる長い旅に赴き、旅が終わると、『おくのほそ道』を含む様々な紀行文を記した。『おくのほそ道』は、英語では *Narrow Road to the Interior* と訳されるが、より一般的には *Narrow Road to the Deep North* として知られている。本章後半部分ではこの『おくのほそ道』を取り上げたい。

芭蕉の代表的な詩の形である俳句は、五・七・五の3つに区切られた17音節で構成される。当然、俳句は日本語で書かれているものなので、翻訳はこの音節の長さとはならない。しかしそれでも、翻訳からも、観察眼と感性が凝縮された珠玉の表現を知ることができる。なお、松尾芭蕉は純粹に俳句だけを書いていたわけではない。複数の詩人による句をつなげた連歌の一句目、すなわち発句をしばしば著した。また芭蕉は、短い文章と俳句を組み合わせ、強く感情に訴える物語の形式(俳文)を発展させた (Hamill 1998)。実際こ

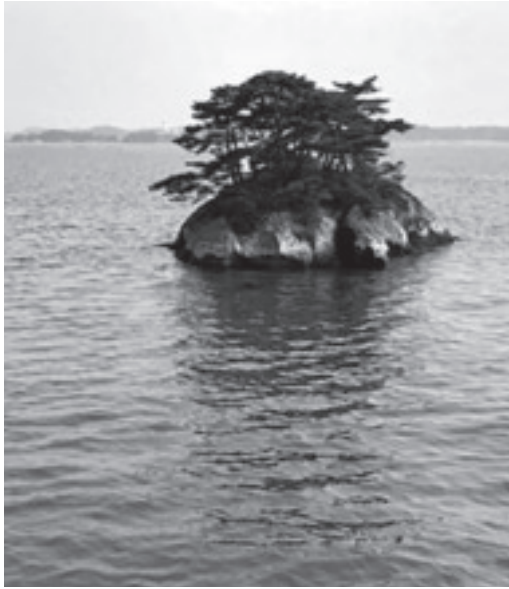


図 13.4 松島の宝石
筆者撮影。

うした散文の多くは、詩と並び、意味や感情面の繊細さを表現するものとなっている。例えば、松島湾に浮かぶ島々を見ながら、そのあまりの美しさに芭蕉が言葉を失い、何も書けなくなったとき、彼は散文によってその美しさを表現したのである(図13.4)。

松の緑こまやかに、枝葉汐風に吹たはめて、屈曲をのづからためたるがごとし。(中略) いずれの人か筆をふるひ詞を尽さむ。『おくのほそ道』、松島)⁹⁾

All covered with deep green pines shaped by salty winds, trained into sea-wind bonsai...Whose word or brush could adequately describe? (Matsuo, trans. Hamill 1998: 16-17)

芭蕉の俳文は当初は巻物に記す形で、旅の後に書かれ出版されていたが、俳句については、旅路の途中で書き、時折滞在先で披露することもあったと

いう。その後、芭蕉の作品は翻訳本としても出版され、読む者それぞれに異なる経験——翻訳を読む際にはしばしば起こることだが——をもたらす。実際のところ、芭蕉の書いた当時の日本語を現代日本語に訳すことでさえ問題を孕むのであるから、英語のような他言語への翻訳については言うまでもない。翻訳は全て、実質的には、芭蕉の作品の様々なメディア表現だといえる。

芭蕉の旅路は、単なる長旅だっただけでなく、しばしば芭蕉が尊敬していた人々の足跡をたどり、歴史のおよび精神的に強い意味を持つ場所を求める旅であった。芭蕉自身の旅は、神聖な古代に思いを馳せた、非常に個人的な巡礼であり、その結果として、今日でも人々を惹きつける旅程となっているのだ。

多くの人々が、芭蕉の足跡をたどる巡礼の旅について記している。その1人、レズリー・ダウン（Lesley Downer）は、こうした旅を行なう欧米人がほとんどいなかった時代に、自分自身の冒険の旅について著している（Downer 1989）。ダウンの文章を読んだ時、筆者は彼女自身の情熱を感じることはできたものの——筆者自身が芭蕉の足跡をたどる前に同書を読んだことが恐らく関係していると思われるが——彼女の著作に完全に引き込まれたとは言いがたかった。さらにダウンは旅を通して日本らしさをほとんど感じられなかったようだが、一方で筆者は芭蕉の日本を、風景の中に、彼の文章の中に、そして少なからず筆者が参加したツアーでの案内や解説の中に、見出すことができた。日本への旅の後、John McBrideという学者の研究を見る機会を得た。McBrideは28年以上にわたり芭蕉の旅について研究を行ない、その足跡をたどっているのだが、その著作が、筆者が参加したツアーを主催するWalk Japanという会社に引き渡されるのに先立ち、それを見せてもらうことができたのだ（McBride n.d.）。Hamill(1998)の翻訳と同様に、筆者はMcBrideの著作に縁を感じた。そして同著作は、ツアーとともに、筆者を日本と芭蕉に結び付ける存在となった。そのほか、旅の途中では、芭蕉に捧げられた多数の彫像、記念碑、博物館と並び、短い劇等、『おくのほそ道』の様々なメディア表現を経験することができた(図13.5)。

そしてなんといっても、特筆すべきなのは、筆者が参加した専門ツアーの存在である。同ツアーは〈芭蕉〉や〈その作品を再表現した人々〉というメ



図 13.5 芭蕉の足跡を記念した像(平泉近郊)
筆者撮影。

ディアに基づきつつ、実質的にはもう一つの新たな〈メディア〉形式を生み出していると言えるものであった。

9. 芭蕉をめぐる筆者のオートエスノグラフィー体験——ツアーにて

前述のとおり、芭蕉自身が歩んだ旅は、芭蕉が敬愛した人々の足跡をたどる、非常に個人的な巡礼だったと言える。したがって、彼の足跡をたどった筆者自身の旅も、折に触れて、芭蕉自身の旅のみならず、千年以上も昔の人々や出来事にも思いを馳せ、つながりを感じるものとなった。それは、何百年もの時を行ったり来たりする、タイム・トラベルのような経験であった。詩の持つ情緒的な性質と芭蕉の詩的な散文が、我々を芭蕉が生きた時代だけでなく、芭蕉が大切にしていた過去の場所や出来事へと誘うのだ。

『おくのほそ道』の冒頭の文と俳句は旅への案内となる。そして、文中の

〈馬〉と〈人生の旅〉への言及が、筆者の心に強く響く。

月日は百代の過客にして、行かふ年も又旅人也。舟の上に生涯をうかべ馬の口とらえて老をむかふる物は、日々旅にして、旅を栖とす。(『おくのほそ道』, 序章)

行春や鳥啼魚の目は泪(『おくのほそ道』, 旅立)

The moon and sun are eternal travelers. Even the years wander on. A lifetime adrift in a boat, or in old age leading a tired horse into the years, every day is a journey...

Spring passes

And the birds cry out - tears

In the eyes of fishes. (Matsuo, trans. Hamill 1998: 3-4)

ツアーの内容は筆者に、訪問先の多くの場所と深くつながる機会と、心が震えるような、非常に感動的でスピリチュアルな経験を与えてくれた。道中我々一行は、芭蕉の作品を読むだけでなく、記念碑を訪れ、再現劇を鑑賞し、時には有名なシーンの再現を行なうことでソーシャルメディア上で旅の体験を共有したりした。さらに、ツアー参加者のうちの何人かは自ら俳句を書いたが、筆者自身はそこまで大胆になることはできなかった。というのも、短い音節の中に芭蕉が込めることができた意味の深さに、筆者は圧倒されていたからだ。ただ、オーストラリアに帰国した現在は、海辺の拙宅の美しさを、繊細な俳句の形で表現しようと挑戦している。以下はその試みの一例である。

Bird wingtips flashing

Diamond cut water ripples

The turning begins



図 13.6 芭蕉ツアーの旅程
(出所) Walk Japan Tour Notes.

光る羽 煌めく波紋 すべては巡る

筆者が参加したツアーの地理的な行程(図13.6)について、ここで詳細な説明を行なうつもりはない。その代わりに、筆者の個人的な感情、思考、そしてテーマに重点をおいて説明していくこととしたい。

筆者にとって最初の芭蕉ゆかりの地となった裏見滝うらみのたきの印象は強烈だった。200年以上前の昔に瞬時に連れて行かれたような、過去とのつながりを直感し、筆者はとても大きな興奮を覚えた。また、その場に自分がいることへの、さらには芭蕉自身の言葉を通じて彼の感じた喜びを自分が体験できることへの、驚きと喜びを感じた。芭蕉の時代には、滝の裏側に続く小道と、その先に小さな洞窟が存在した。今日、小道は既に崩壊してしまったが、その情景を思い描くことは難しくはない。芭蕉はそこに座り、次のように著したのだ。

暫時は滝に籠るや夏の初(『おくのほそ道』, 日光)

Stopped awhile

Inside a waterfall-

Summer retreat begins. (Matsuo, trans. Hamill 1998: 6)

この地が我々の旅の起点となったのと同じように、芭蕉にとっても「夏の初はじめ」の旅の始まりであった。滝によって風が引き起こされ、草が揺れている動画を筆者はソーシャルメディアで共有した。この光景は、非常に繊細でありつつも、力強さを身近に感じさせるものだった(図13.7)。

自然の素朴ながらも深遠な美しさから目を転じ、ユネスコ世界文化遺産にも登録されている平泉⁵⁾に向かう。芭蕉はこの地で、芭蕉の時代より遥か昔の、奥州藤原三代の栄枯盛衰と源義経の悲劇に思いを馳せる。芭蕉がこの地を訪れた当時でさえ、この地に残っていたのは原野と廃墟だけだった。今日でもその様子は変わらず、わずかに柱の基礎だけが残った、何もない原野が広がる。



図 13.7 かつて芭蕉が裏側に座ったとされる裏見滝筆者撮影。

夏草や兵どもが夢の跡 (『おくのほそ道』, 平泉)

Summer grasses:

all that remains of great soldiers'

imperial dreams. (Matsuo, trans. Hamill 1998: 19)

この詩と、何もない原野を目の当たりにし、筆者は悄然とした悲しい気持ちになった。芭蕉の言葉は、こうした戦いの虚しさや、人間の傲慢さを強く印象付けるものだった。誰しも、自分自身(そして自分の理想や大義)が非常に重要なものだと思っているが、しかし結局最後に残るものは自然なのだ。今でも、この俳句を読むと、自身が旅したときの情景が蘇ってくるのだが、しかしそれは否定的な悲しい気持ちではなく、とても深遠で思索深い感情となっている。

その後芭蕉は神聖な羽黒山を訪れる。我々も、樹齢600年の杉の巨木と小



図13.8 羽黒山に置かれた芭蕉記念碑
筆者撮影。

さな社が左右に並ぶ，2,446段の階段を登って祭殿を訪れ，巡礼者とともに神社の境内に滞在し，芭蕉が行なったように静かに早朝の祈祷に参加した。

惣て，此山中の微細，行者の法式として他言する事を禁ず。仍て筆をとめて記さず。（『おくのほそ道』，羽黒）

To say more is sacrilege. Forbidden to speak, put down the brush, respect Shinto rites. (Matsuo, trans. Hamill 1998: 25)

翌朝，筆者は祈祷の前に境内を歩き，大好きな社や地蔵（水子地蔵も含む）のひとつひとつを見て回った。このように，子供のような好奇心を持って旅するべきだと筆者は考えている。

ここでも，芭蕉は，社の近くの目立つ場所に置かれた記念碑の形で崇められ，その存在は不朽のものとなっている（図13.8）。

芭蕉の足跡における数々の見どころの一つに、堺田の〈封人の家〉⁶⁾——国境を守る役人の家——がある。これは、当時芭蕉が訪れた中で、唯一現存する建物と言われ、芭蕉はここに泊まったとされている。この家を訪れ、芭蕉が実際に座ったかもしれない板の間に座ると、当初、やや奇妙に思われた俳句が納得できるものになった。〈封人の家〉では、家族や旅人が生活するだけでなく、馬も飼われていたのだ。芭蕉は、この家における滞在が快適ではなかったことを、包み隠さず表現している。

蚤虱馬の尿する枕もと（『おくのほそ道』、尿前の関）

Eaten alive by
lice and fleas - now the horse
beside my pillow pees. (Matsuo, trans. Hamill 1998: 20)

現地を訪れ、複数の馬が同じ家の中にいたことと、日本語は複数形を明確に表記しないことから、尿する「馬」を単数形で英訳したことが必ずしも正解ではないことを理解すると、芭蕉がなぜこれほどまでに不快に感じたのか、筆者には明確になったのだった。かなりの時間を馬と過ごし（ともに寝）た者の1人として、筆者は、1頭の馬が放尿すると他のほとんどの馬も追随することを知っている。したがって、芭蕉が経験したのは、おそらく、かなり騒々しく悪臭の漂う出来事だったのだ！ 芭蕉の最も有名な俳句の一つについて、個人的にこうした洞察ができたことは、筆者にとって大変名誉なことだった。

筆者らは堺田近くの温泉に滞在した際、芭蕉が〈封人の家〉に宿泊した場面の再現劇を（馬の臭いは抜きで！）観賞し、芭蕉も食したであろう〈奈良茶膳〉として知られる典型的な朝食を食べた。黒塗りの盆の上に並んだ4つの赤い椀の中には、黒豆、漬物、栗ごはん、そして山菜が入っていた（McBride n.d.）。再現劇は、筆者ら12人の小団体が夕飯を食べている間に行なわれた。全て日本語で演じられたが——我々全員がその筋書きを知っていたため問題はなかった——、落ち着いていて、非常に面白いものだった（図13.9）。



図 13.9 〈封人の家〉で夜を明かした芭蕉が俳句を著している様子を再現する地域住民
筆者撮影。

〈封人の家〉と温泉を経験した後、筆者と、芭蕉と彼を敬愛する人々とがつながっているように感じ始めたのだった。

10. 筆者にとって芭蕉の俳句が意味するものとは……

ここまで、芭蕉の足跡をたどったツアーを様々な側面から説明しながら、オートエスノグラフィーを通して考察を行なってきた。ここでは、筆者が現在日本についてどのように感じているのかを、前節に続き筆者の経験に照らす形で、述べてみたい。

まず重要なのは、芭蕉の俳文の英語訳(や現代日本語訳)には様々なバリエーションがあり、それぞれが読者に異なる感情をもたらすという点である。したがって、それらはそれぞれ別個のメディア形式として捉えるべきである。多くの英語訳では、この作品を *Narrow Road to the Deep North* と呼んでいるが、

筆者は主にSam Hamillの翻訳——彼がタイトルを*Narrow Road to the Interior*と訳した以下のような理由から、というわけではないが——に頼ることとした。

芭蕉の旅は巡礼だった。旅行記であると同時に、自身の内面への旅であり、洞察を得て終わる、自己探求なのだ。(中略) 旅すること自体が居場所なのである。(Hamill 1998: xx)

日本文化のような、礼儀や規則に隠れた文化に入り込むのは容易ではないが、この旅はそれを叶えてくれた。旅の間に筆者は感動しただけではない。過去に何度も日本を訪れてはいたが、日本の偉大な詩人の1人に関する自分の知識と、その足跡をたどった自らの経験は、これまでにない日本への入口を筆者に与えてくれた。今では、日本、そしてその自然・文化・宗教・人々との間に、情緒的な強いつながりを感じている。また、芸術を真に大切にしている日本で尊敬される詩人の1人について、自分が少しばかり知識を持つことができたことに、誇りを感じている。

11. 結語——ツーリズムにおける詩の力

〈ポピュラーカルチャー〉というと、映画、テレビ、YouTube、音楽、それからソーシャルメディアといった、最新のメディア・トレンドを思い浮かべがちだ。しかし、今なお多くの人々にとって、詩は最も強力な情緒的つながりをもたらす存在の一つである。

本章の冒頭で述べたように、本章では、母国の詩と筆者自身との深いつながり、そのつながりが母国内の旅行経験にどのように作用するのか、そして同時に、異なる国・文化の詩がどのように海外旅行の経験を深めるのか、という点について、検証を行ってきた。本章で取り上げた2つの詩の形式には、構造、時代、距離、さらに筆者自身のツーリスト経験にどのような影響を与えたのかという点で、明確な違いがある。しかし、非常に情緒的な内容

であるという点、筆者が母国文化や異文化の構成要素と深く結び付くことを可能にしたという点で、両者には共通点がある。

正直なところ、日本での芭蕉を通じた経験が、これほどまでに強力なものになるとは、そしてこれほどまでに調査研究における内省の重要性を示唆するものになるとは、予想していなかった。

本章で行ってきた検証作業——母国の詩とそれらが筆者の国内旅行経験にもたらす作用、そして異なる国・文化の詩が筆者の海外旅行経験にもたらす作用、についての検証作業——を通して、コンテンツツーリズムにおける詩の力を明らかにすることができたと信じている。

注

- 1) 編者補注：バンジョー(Banjo)は、Andrew Barton Paterson のペンネーム。
- 2) 編者補注：オーストラリアにおける詩やフォーク音楽の一形式。オーストラリアのブッシュの風景や暮らしを歌う。ブッシュ・ソング、ブッシュ・ポエムとも。
- 3) 日本語は訳者による。
- 4) 編者補注：『おくのほそ道』原文の日本語記述ならびに、〈松島〉等の章名は、松尾芭蕉、萩原恭男校注(1979)『おくのほそ道——付・曾良旅日記、奥細道菅菰抄』岩波書店に依拠した。以下同じ。
- 5) 編者補注：平泉が世界遺産に登録されたのは、奥州藤原氏が栄えた平安時代末期の寺院や遺跡群が、仏国土(浄土)を表す建築・庭園および考古学的遺跡群として評価を受けたことによる。
- 6) 編者補注：重要文化財・旧有路家住宅。通称〈封人の家〉と呼ばれるが、これは『おくのほそ道』にちなむ。

参考文献

- ABC (2017) Back Roads: November 27. See <https://tvtonight.com.au/2017/11/back-roads-nov-27.html> (accessed November 2018).
- Beeton, S. (1994) *Beeton's Guide to Adventure Horse Riding*. Balwyn: On Track Tourism Consultants.
- Beeton, S. (2001) Horseback tourism in Victoria: Proactive crisis management. *Current Issues in Tourism* 4 (5), 403–421.
- Beeton, S. (2008) From the screen to the field: The influence of film on tourism and recreation. *Tourism Recreation Research* 33 (1), 39–47.
- Beeton, S. (2015) *Travel, Tourism and the Moving Image*. Bristol: Channel View Publications.
- Beeton, S. (2016) *Film-Induced Tourism* (2nd edn). Bristol: Channel View Publications.

- Beeton, S., Yamamura, T. and Seaton, P. (2013) The mediatisation of culture: Japanese contents tourism and pop culture. In J.-A. Lester and C. Scarles (eds) *Mediating the Tourist Experience: From Brochures to Virtual Encounters* (pp. 139–154). Farnham: Ashgate.
- Crawford, R.M. (1960) The birthplace of a culture. In C. Wallace-Crabbe (ed.) *The Australian Nationalists: Modern Critical Essays* (pp. 220–224). Melbourne: Oxford University Press.
- Denzin, N.K. (1997) *Interpretive Ethnography: Ethnographic Practices for the 21st Century*. Thousand Oaks, CA: Sage.
- Downer (1989) *On the Narrow Road to the Deep North: Journey into a Lost Japan*. London: Jonathan Cape.
- Hadgraft, C. (1963) Literature. In A.L. McLeod (ed.) *The Pattern of Australian Culture* (pp. 42–101). Ithaca, NY: Cornell University Press.
- Hamill, S. (1998) Translator's introduction. In B. Matsuo *Narrow Road to the Interior, and Other Writings* (trans. S. Hamill) (pp. ix–xxxi). Boulder, CO: Shambala.
- 松尾芭蕉, 萩原恭男校注(1979)『おくのほそ道——付・曾良旅日記, 奥細道菅菰抄』岩波書店.
- Matsuo, B. (1998) *Narrow Road to the Interior, and Other Writings* (trans. S. Hamill). Boulder, CO: Shambala. (Originally published 1688.)
- McBride, J. (n.d.) The narrow road of Oku: Matsuo Basho's Oku no Hosomichi (unpublished manuscript).
- Moore, T.I. (1962) The red page rhadamanthus: A.G. Stephens. In J. Jones (ed.) *Image of Australia* (The Texas Quarterly, summer edn) (pp. 96–103). Austin TX: University of Texas.
- Morris, N. (2018) Record attempt to train 70 brumbies in seven days transforms horses and humans. ABC 7.30 Report, 19 February. <http://www.abc.net.au/news/2018-01-30/training-70-horses-in-7-days-tranforms-horses-and-humans/9359244> (accessed September, 2017).
- Palmer, V. (1971) The legend. In C. Wallace-Crabbe (ed.) *The Australian Nationalists - Modern Critical Essays* (pp. 1–21). Melbourne: Oxford University Press.
- Reijnders, S. (2011) *Places of the Imagination: Media, Tourism, Culture*. Farnham: Ashgate.
- Stone, W. (1977) *The Best of Banjo Paterson*. Sydney: Lansdowne Press.
- Wallace-Crabbe, C. (1971) Introduction. In C. Wallace-Crabbe (ed.) *The Australian Nationalists - Modern Critical Essays* (pp. ix–xiii). Melbourne: Oxford University Press.
- Ward, R. (1963) The social fabric. In A.L. McLeod (ed.) *The Pattern of Australian Culture* (pp. 12–41). Ithaca, NY: Cornell University Press.
- Ward, R. (1966) *The Australian Legend* (2nd edn). Melbourne: Oxford University Press.